

「企画」を立て、これに基づいて「取材」を重ね、情報を入手する。これまで文章を執筆する上での仕込みについて、紹介してきました。今回は、記事執筆の上で不可欠な「書く」ことの動機づけ・出発点について、まとめていただきました。

「なぜ」を出発点にしたい。

前回までは「企画」や「取材」のことについて書き、今回はいよいよ「表現」のことを書く予定だった。が、この予定を変え、「なぜ」ということについて書く。

記事を書くうえで根本的に必要なのは「なぜ」を追及することだということをどうして書いておきたいからだ。

最近、納豆ダイエット事件というのがあった。あるテレビ局が「納豆を食べるだけでやせられる」という番組を作った。アメリカの学者の研究、実験をもとにしたものだという。番組を見た『週刊朝日』の女性記者が首をかしげた。「アメリカの人って、そんなに長期間、納豆を食べられるかしら」

そう、そういえばそうだ。なぜ、納豆なのか？ 仲間たちが「なぜ」の追及をはじめ、調べてゆくうちに「捏造」の事実が浮かび上がったという。

「納豆の好きなアメリカ人はそう多くはないだろう。それなのに、なぜ？」という疑問を

持つことから、『週刊朝日』の取材がはじまった。すぐれた記事、読み物は、すぐれた「なぜ」からはじまるのだ。

私たちの周辺には、たくさんの「なぜ」がある。生態系の大切さを説く人は「プラスチック製品を無造作に捨てるな」という。ではなぜ、いけないのか？ ドイツのある小学校の先生が、そのことを学習の主題にした。

二枚のガラス板と木の枠で作った薄型の箱に、土や砂や落ち葉を入れた。プラスチックやアルミの破片も土にまぜ、最後にミミズを入れた。むろん水もやる。

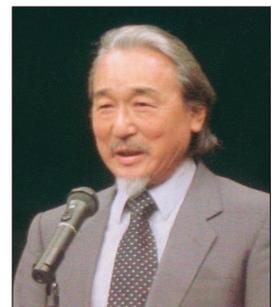
ミミズは落ち葉を食べて土にするが、プラスチックなどは食べない。だからそれらはいつまでも残ってしまう。毎日、ガラスごしの観察を続けた子どもたちは「消えることのないゴミ」の怖さを知り、やがて、ゴミの分別やリサイクルの活動をはじめようになった。

この手法は新聞の記事を書くときにも応用できる。箱の中のミミズ、落ち葉、プラスチックの様子を写真にし、説明を加えれば、プラスチックゴミがいかに厄介なお荷物かということが読む人に伝わるだろう。

「なぜ」はたたくさんある。たとえば私たちはなぜ、巨費を投じて遠くの川の水を運び、そのくせ身近な校舎の屋根や校庭に降る雨は無造作に下水に捨てているのだろうか。

そのなぜを追及していけば、なぜ、身近に降る雨水の活用を考えないのか、ということになってゆく。さらに進んで校内に雨水タンクを備えることを思いつく子が現れてもふしぎではない。もっと大きな雨水タンクを造って、トイレの水に使うという実践が学校の新聞をにぎわすことになるかもしれない。そういう新聞をこそ、私は読みたい。

なぜ、街のゴミはこんなに多いのか。なぜ、近所の川はこんなに汚いのか。なぜ、子ども目から見て、見にくい信号灯があるのか。なぜ、校庭に来る野鳥の数が減ったのか。記事で追及すべき「なぜ」は無数にある。



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。